【5】 実 践 事 例 ―― 授業づくり ――

以上のべた高等部の教育目標や方針にもとづき、また、研究課題にそっての実践は次のようなものとなった。

〔1〕 高等部の授業づくりについて

授業づくりの視点としては、①．**発達と教育の関連（文化的な活動の中で発達の主体は育つ）** ②．**学習集団の意図的編成** ③．**集団指導と個別指導の関連** ④．**同一教材、複数課題** ⑤．**授業の展開と評価**等が提起されてきた。そして、この視点に立って個々の生徒を着実に「授業の中で育てる」ことが課題となってきた。

いうまでもなく、1時間ごとの授業が効果的に作用しあい、系統性を重視した学習の中で生徒の成長・発達が促されるものである。特に、障害をもった生徒たちにとって、個々の発達課題に応じて教材が配置され、活動場面が保障されることは、学習の場となる授業において最も重視されなければならない点である。そこで、高等部では、この視点を次のように具体化して取り組むこととした。

(1) 授業の中での文化的な活動を重視する

本校の生徒にとって、最もつけたい力でありながら困難な点が「認識能力の育成」であり、社会参加にあたっても求められている力である。この力は、かなり系統的な取り組みを求められるものであるので、「教科的学習」での課題とした。そのため教育課程の中では、課題別教科学習や、保健体育科・音楽科の中で重点的に取り組んできた。

(2) 集団が育てる力（学級集団）を重視しつつ、個別の基礎的な力を育てる学習集団の編成に配慮する

授業（学習）を効果的に展開するためには、学習集団が発達段階や障害の程度に配慮して編成されている必要がある。それは、個々の生徒の課題に応じた教材の配置を可能とするだけでなく、生徒の学習参加を容易にし、活動量を豊富にすると考えてきた。

(3) 集団指導の中で個別の配慮を重視した取り組みとした

学級集団（基礎集団）での学習は「生活一般」が中心となったが、その題材は、「学校・学部行事」に求められることが多く、児童・生徒会活動や学部・学級の活動の中では、生徒個々の課題を見きわめて、その役割りをあたえてきた。

(4) 同一の教材で、生徒一人ひとりの課題に対応できるように教育課程に工夫をこらした

この課題は、すべての教科・領域で取り組んできたが、格別、高等部の教育目標の中心となった「社会的自立」とかかわる「職業科」の中で重視してきた。

(5) 生徒が生き生きと授業に参加し、その力を十分に発揮できる授業を創造する

授業の目標が生徒一人ひとりに十分に理解されていることが重要であると考えた。そのために、年間指導計画の作成に腐心するとともに、時間単位の学習展開に創意、工夫をこらしてきた。

その上で、生徒の学習の成果を正確に評価するための基準を検討してきた。全教科・領域について成案を得ることはできなかったが、「職業科」についての評価表を作成することができた。